

ロシア国立交響楽団

〈シンフォニック・カペレ〉

指揮: ヴァレリー・ポリャンスキー

State Symphony Capella of Russia
Varely Polyansky, Conductor

迫力と抒情のロシア・サウンド!

「1812年」
交響曲 第5番
チャイコフスキー

だったん人の踊り
ボロディン

「くるみ割り人形」
「白鳥の湖」
チャイコフスキー

2017 **10/29** (日) 1:30pm

日本特殊陶業市民会館フォレストホール

S ¥12,000 A ¥10,000 B ¥8,000 C ¥7,000 D ¥5,000 学生 ¥2,000 (税込)

学生券 ご希望の方は中京テレビ事業ホームページよりエントリーしてください。
公演1か月前に抽選の上、お席をお取りできるか否か登録メールアドレスへご連絡いたします。
エントリー開始は一般発売日以降となります。

※プログラム、出演者等変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。
※未就学児のご入場はご同伴の場合でもお断りいたします。

主催:  CHUKYO TV 企画・運営: 中京テレビ事業

お問合せ
お申込み 中京テレビ事業 ☎052-588-4477
(月~金 10:00~17:00 / 土・日・祝日休業)

<http://cte.jp/> 中京テレビ事業  5/27(土) 一般発売
10:00~
座席表からお席をお選びいただけます!

チケット販売所

中京テレビ事業チケットセンター	052-320-9933
チケットぴあ (Pコード 326-974)	0570-02-9999
ローソンチケット (Lコード 42679)	0570-084-004
愛知芸術文化センターPG	052-972-0430
栄プレチケ92	052-953-0777
e+ (イープラス)	eplus.jp
名鉄ホールチケットセンター	052-561-7755
セブン-イレブン、サークルK、サンクス、ローソン、ミニストップ、ファミリーマート店頭	

2015年の初来日で驚愕の交響曲連続演奏ツアーを敢行、全国各地で売り切れが続出した、ロシア伝統の迫力あふれる演奏を身上とするロシア国立交響楽団。「赤いカラヤン」の異名をもつ音楽監督ヴァレリー・ポリャンスキー指揮のもと、絹糸を丁寧に編んでゆくような緻密なハーモニーを練り上げると共に、激しいシーンでは一転して金管を唸らせ闇を切り裂くような演奏を繰り広げます。ムラヴィンスキー、スヴェトラノフ、ロジェストヴェンスキー…ロシア巨匠の流れをくむポリャンスキー&ロシア国立響が、今回は”ロシア管弦楽名曲集”に挑みます。チャイコフスキー、ボロディン、グリンカなど、ロシアを代表する作曲家の抒情溢れる美しい旋律や激しく躍動する楽曲で、このオーケストラの特質がよく活きるプログラム。ロシア音楽の真髄をたっぷりとお楽しみください。

ロシア管弦楽曲集

グリンカ：歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲

チャイコフスキー：イタリア奇想曲

チャイコフスキー：「くるみ割り人形」「白鳥の湖」より

ボロディン：だったん人の踊り

チャイコフスキー：祝典序曲「1812年」

チャイコフスキー：交響曲 第5番 ホ短調 op.64

ロシア国立交響楽団 〈シンフォニック・カペレ〉

State Symphony Capella of Russia

1957年に旧ソ連の巨匠サムイル・サモソードが設立した全ソヴィエト放送オペラ交響楽団を前身とする。71年よりマクシム・ショスタコーヴィチが音楽監督に就任し、アメリカに亡命する81年までに父ドミトリーの多くの作品を発表した。のちにロジェストヴェンスキーを音楽監督に迎えソヴィエト国立文化省交響楽団と改称、さらに91年にソヴィエト連邦国立室内合唱団と合併して現名称となる。この際合唱指揮の重鎮ヴァレリー・ポリャンスキーが音楽監督に就任し、ヴェルディの「レクイエム」やドヴォルザーク「テ・デウム」、ラフマニノフ「鐘」など大作を次々と演奏しオーケストラのレパートリーを飛躍的に拡充させ、「ロシアで最も優れた交響楽団」と評されるようになった。その名声により、旧ソ連内をはじめアメリカ、イギリス、スイス、ドイツ、イタリア等欧米各国に定期的に招聘されて絶賛を博している。ソヴィエト国立文化省交響楽団時代から数多くの録音を残しており、ロジェストヴェンスキーによるチャイコフスキー交響曲全集（シャンドス）、ショスタコーヴィチの各交響曲、ポリャンスキーによるチャイコフスキーとショスタコーヴィチの交響曲やグラスノフ交響曲全集、ラフマニノフの交響詩「鐘」を含む管弦楽曲集と交響曲全集をリリースしている。



指揮:ヴァレリー・ポリャンスキー

Varely Polyansky, Conductor

1949年モスクワ生まれ。モスクワ音楽院にて、合唱音楽の権威ボリス・クリコフに師事して在学中から指揮活動を開始する。1975年自ら結成したロシア国立室内合唱団を率い、グイド・ダレッツォ国際合唱コンクールでロシアの団体としては初の優勝を飾り、特別賞、最優秀指揮者賞も受賞。以来、「合唱のカラヤン」「赤いカラヤン」等の異名を拝す。一方、モスクワ・オペレッタ劇場の指揮者を務める傍ら、ゲンナジ・ロジェストヴェンスキーに指揮法を学び、ボリショイ劇場等で多くのオペラ・プロダクションを手掛けた。1992年ロジェストヴェンスキーの要請で旧ソヴィエト国立文化省交響楽団を改称したロシア国立交響楽団の音楽監督に就任、世界各国で招聘されいずれのツアーも大成功を博す。幾重にも練りあげられたピアノニッシモを駆使する独自の手法から、ロシアきっての鬼才指揮者と評される。1996年ロシア人民芸術家叙位、2002年よりエーテボリ音楽祭主席指揮者。モスクワ音楽院教授、ラフマニノフ国際ピアノ・コンクール総裁を務める。



Review

—— 聴き慣れたはずの旋律から、晩年に向かうチャイコフスキーの内面が多層的に立ち現われてきた。

(吉田純子・朝日新聞)

—— 最後は「悲愴」の終楽章の圧倒的なうねりと慟哭。気迫に飲まれた。グローバル化の時代にこのようなコンビが存在しうるのは、無性にうれしかった。

クラシック音楽の伝統はまだ死なない。

(片山杜秀・音楽評論家)

—— 大草原のような広がり、クライマックスで深々とした呼吸に達した。フィナーレではうなる管弦楽をポリャンスキーが大きく揺すって熱狂的な喝さいを誘った。

(音楽評論家・江藤光紀／日本経済新聞掲載)